

No.5

Un roseau

アンロゾ

総合教育科目ガイドブック

市大で学ぶ後輩たちへ

前大阪市立大学学長 児玉隆夫

キャンパスに自画像を描こう

工学研究科・工学部 南齋征夫

「この頃の学生」のための勉強法

文学研究科・文学部 井上浩一



旧教養キャンパス中庭の桜

2004年3月

編集・発行 大阪市立大学大学教育研究センター

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

TEL (06)6605-2131

市大で学ぶ後輩たちへ



前学長
児玉隆夫

私は一九六二年に入学して以来、学生として、また、教員として四十年以上をこの市大で過ごしました。これまでの人生の大半を母校で過ごしたことになります。私はまもなく現役を去ります

が、この間を振り返ってみて経験したこと、感じたことなどを記してみました。これから市大で学ぼうとする諸君の参考になればと思います。

市大という大学

市大（前身の市立大阪商科大学）は当時の大阪市長を先頭に、大阪市民と一緒になつてつくった大学です。創設当初からの「自由と進取の気風」は今も保たれています。といっても、いくつもの大学を経験する人はほとんどいないので比較しようがない、といわれるかも知れません。これは大学を移られた多くの先生方から伺った話や、自身の体験からの感想でもあります。悪くいえば、何でもありで大阪的といえれば大阪的です。しかし、ルール違反とひとに迷惑になることだけは

タイトル “Un roseau (アン ロゾ)”

— 一本の葦 — について

B. Pascal (1623-1662) は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de
(ロム・ネ・カン・ロゾ、ル・ブリュ・フェーブル・ドゥ・
la nature, mais c'est un roseau pensant.
ラ・ナトゥール、メ・セタン・ロゾ・パンサン)

一人は一本の葦に過ぎない。自然界で
もっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。—

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、考える（思考する、思想する）という行為によって、有形の現象の世界（形而下の世界）のみならず、その奥にある広い広い世界（形而上の世界）を知ることができる存在なのだ。

Un roseauとは「あなた」のことなのです。

慎んで下さい。

自由な雰囲気とともにもう一つの特徴は「庶民的な大学」という面です。市大の伝統ともいえるのでしょいか、気さくに話が出来る先生がたくさんおられます。それぞれの専門分野では日本を代表するような先生でも、威厳を漂わせて近寄りがたいという先生はあまりいません（学部によって多少の違いはあると思いますが）。学生と同じ目線に立って対応してくれます。よい話し相手になってくれる先生をたくさんつくられることをお勧めします。市大には九百人近い先生がおられるのですから、授業を通してだけでなく、いろいろな機会をつかまえて親しくできる先生を見つけてください。どれくらい先生方と親しく話が出るか、それは皆さん次第です。せっかくこのような環境を活かさなければ損です。

本当の学問へ、憶えるよりも理解

私自身は、実は大学一年・二年のころはあまり勉強に身を入れてはおりませんでした。高校時代から山登りに凝り、大学ではスキー部に入ったので、山とスキーとその資金づくりのためのアルバイトでとても忙しかったのです。教養時代（当時はこちら呼んだ）をこのように過ごしたことを悔やんでいるわけではありませんが、その分、後で苦労をしました。

そのようなわけで、「一年次からしっかりと勉強に精を出しなさい」などと、いえた立場ではありません。しかし、勉強をするからには、学んだことが大体分かったとか、何となく分かった感じがする、といった中途半端はダメです。取り組んだ分だけはしっかりと理解することです。なにもか

も全部というわけではありません。やったことだけはちゃんと分かるまでやるようにする、ということです。

二つの環境

私の体験から、学習であっても研究であっても基本的には同じで、二つの環境が必要と考えています。

その一つは、何者にも妨げられることなく、一人で考えたり、読んだりすることができる環境です。一人で過ごす時間を持つことです。孤独ではあるけれど一人で読み、そして考えることが大事なのです。これは一人で考えることに耐えられる訓練ともいえますし、孤独に耐えられる訓練ともいえます。大きさにいえば、自分が一人の自立し

た存在となるために、自分を鍛える一つの方法といえます。

一人で学習する方が捗（はかど）る場合もありますが、行き詰まることも多く、たいていすぐに行き詰まります。そのようなときでも、自問自答しながら見方を変えたり、問題の立て方を変えたり、いろいろ工夫しながらねばり強く考えることです。頭は考えた分だけ訓練されるのではないかと思います。頭を鍛え自分を鍛えることにはなりません。分からないことをすぐ誰かに訊くというのでは、いつまでたっても一人の自立した、もの考える主体になれません。初めはつらいかも知れないけれど、これは訓練なのです。

もう一つは先程とは正反対で、友達・先輩・或いは先生など話し合える相手がいる環境。自分が疑問に思っていることを一緒に考えてくれる、或いは教えてくれる先生か先輩・仲間がいることで

す。もし、いなければ見つけることです。本学には気軽に相談に乗ってくれる先生がたくさんいる筈です。そのような人を見つけておくことは大きな財産をもつことになります。

分らないことを自分から訊くのは最初は恥ずかしく感じることでしょう。ですから気の置けない、何でも話せる仲間が掛け替えのないものです。また、皆がいる議論の場で自分の意見をいうことは、自分を皆の前にさらけ出すようで、勇気のいることです。しかし、ここは気取らずに大阪的にいくことを勧めます。意見を言うことで人間として強くなるし、少なくとも自分一人の思いこみの世界から脱却できます。いろいろな意見を出し合うことで、やがて自分に自信がもてるようになります。

このような、対照的というのでしょうか、正反対の二つの環境があるのです。

議論・討論の効用

いま振り返って考えてみると、私を育ててくれたのは本や論文などではなく、先輩や同僚、あるいは先生との議論でした。その経験から、皆さんにも是非ともお勧めしたいのです。

いかに自分なりに一生懸命考えたつもりでも、気が付かなかったことを指摘されて目から鱗が落ちる思いをしたり、議論をしているうちにはっと気が付くこと、それまではおぼろげだった理解が明確になる、などこれ以上の学習法はないように思います。私は自然科学を専門としていますが、他の分野でも事情は同じだと思います。

議論をしているときは思考力を最大に働かせ、頭が最も活発に働いているときだと思えます。思

考力がとても鍛えられるし、議論のやりとりの中で自分の新しい面が掘り起こされるように思います。

ただ、議論をうまく進めるのは易しいことではありません。特に相手による面が大きく、日本人の多くは議論の仕方が上手ではありません。物事をよりよく知るため、あるいは誰もが納得できる到達点を見出すための議論では、勝った負けたではない筈です。互いにアイディアをしぼり、意見を出し合って、納得がいく結論に到達できるかどうかです。

しかし、人間には感情が伴うので簡単にはいきません。相手の意見に反論するとき、その人の人間性や人格を否定するような言い方をしたり、あるいはそのように受け取られて、ときに喧嘩にさえなりかねません。負けず嫌いの人は、本来の議論の筋を離れても、相手の弱点を捉えてやりこめ

てしまったりします。

議論では負けたとしても、自分が考えていたところが不合理であったのなら、それを気づかせてくれたことに感謝すべきなのだけれど、なかなかそうはいかないのが普通です。しかし、本当にいい議論をした後は、たとえ負けたとしても、充実した気分になるものです。

私の場合はよく議論したのは研究室に入ってからです。先輩や先生と物理のことやそのほか世の中のできごと何でもテーマにして、夕方から時には明け方まで毎日のように議論をしました。

後の方になってからは主に先生と議論をしました。が、これは非常に手強かった。私の先生は「自分のつとめは、君たち若い者が私を追い越すのを手助けすることだ」と皆に言っていました。とてもありがたいことです。ただし「易々とは抜かれない。自分も頑張る。その上で、追い抜けるかどうか

かだ」という姿勢でした。この先生とは何十回も、数え切れないくらい議論をしました。

このような先生がいま市大にどれくらいおられるか、分かりません。ここまで議論につきあってくれる先生はそう多くはないと思います。しかし、何度も言うように市大の先生の多くは気さくで、威張ることなく、話し相手になってくれます。これが市大の最大の特徴ではないかと思っています。

大学はある面で知的戦いの場、道場です。勝った負けたではなく、自分を鍛えるところなのです。

転換点

皆さんはこれから本当の学問を学び、いろいろ

議論をしていてあることが熱力学の考え方で説明できるかどうかとなると、それを使って問題が解けるかどうかというレベルではなくなります。

これまでの熱力学で考えられる範囲、それが取り扱える現象、熱力学とはどういうものなのか、その限界も含めて把握できていないものを考えるときに自分の主張には使えません。自分なりにその学問はどのようなものか、学んだことを頭の中で再構成できていないと、ものを考えるときに役に立たないことが分かります。

ある時期、これまで学んだものを自分なりに組み立て直す必要が生じます。どの分野でもきつとそうだと思います。そうしないと知識が自分のものになりません。すでに説明ができたこととまだ未解決の問題として残っているかの判断がつかないのです。

このようなプロセスは誰もが経験することだと

なことを体系的に修得していく筈です。それを通じてしっかりとした知識を身につけるわけです。

しかし、体系的に学ぶことでそれぞれの専門分野での判断力や思考力が身につくでしょうか。私の答えはほとんど否です。しっかりとした知識を身につけ、理解することは不可欠です。しかし、これだけでは不十分なのです。

私の場合、物理の勉強を学部時代に一通りしました。すべての分野というわけではありませんが教科書・専門書に書いてある内容は理解したつもりです。しかし、例えば実験である振る舞いを観測し、これをどう考えるかを皆で議論するとき、教科書の知識では議論できないことに気づきます。

それまでの勉強、たとえば熱力学を勉強したとします。これを使っているような問題を解くことができ、熱力学は分かったと考えます。しかし、

思います。学問の世界だけでなく、どのような分野に進むにしても同じだと思います。得られた知識や理解を自分のものとして使いこなせるには、自分の頭の中で再構成するというプロセスを経なければならぬ、これは避けられないことだと思います。このようにして、自然観・世界観といった、自分なりの哲学ができていくのだと思います。

最初はしっかりと理解すること、そしてそれらを自分の頭の中で組み直すこと、そのようにして初めて学んだことが活かされます。私の場合は、いろいろな人との議論を通じてこれを経験しました。やり方はこれ一つではないかも知れませんが、少なくともこのやり方でできることは確かです。

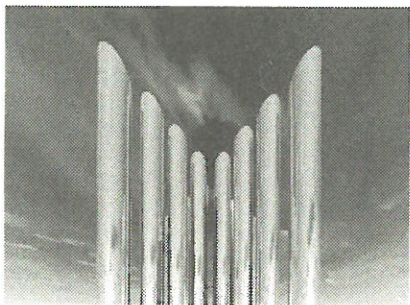
未知のものに向かう

私は大学で学ぶ目的は、この「未知のものに立ち向かえる能力」を身につけることに尽きるのではないかと思っています。もちろんこのほかに「人間としてどうあるべきか」という、より根源的な問題があるのですが、これについては別の機会に譲ります。今学んでいる皆さんに、このようなことを言ってもピンとこないかも知れません。しかし、これはゴールだと思って下さい。

未知の問題に挑むのは学問の世界に限ったことではありません。どの分野にもあてはまることです。この世の中は未知の問題でいっぱいなのです。このことは今更ことわらなくても、今の世の中が多くの問題を抱えていることはもう十分ご存じのことでしょう。

二十世紀は多くの成果を挙げましたが、それと

同時に多くの問題も生みました。私たちはその成果を享受する一方で残された多くの問題を抱えています。それらは身近なものからより深刻で困難なものまでさまざまです。市大で学んだ皆さんが将来これらの問題に挑戦してくれることを願っています。



編集部からひとこと

児玉前学長については、かつて朝日新聞の朝刊第一面のコラム「天声人語」で次のように紹介されたことがあります。ご存知でしたか。

大阪市立大学の学長、児玉隆夫さん(五九)は、元旋盤工の物理学者である。

兄二人姉二人はみな中学を終えたら働いた。隆夫少年は父のような旋盤工になりたいと、中卒後に職業訓練所に通う。大阪大工学部に就職し、実験装置作りを任された。仕事にはすぐ慣れたが、同年代の仲間が周りにいないのが寂しくなり、働きながら定時制高校に通う。

山岳部に入り、週末はテントをかついで六甲の山に登った。先生も一緒に来る。先生といっても、阪大や京大の大学院生が多かった。宇宙のこと、学問のこと、人生のこと。星空を見ながら何でも語り合えた。

だんだん、自分も大学へ行きたくなった。一年間、夜間の予備校に通って大阪市立大学理学部に合格。旋盤工をやめて、低温物理を専攻した。絶対零度(マイナス二七三度)に近い超低温を実験室の中で作り出し、そこで起こる現象を探る学問だ。

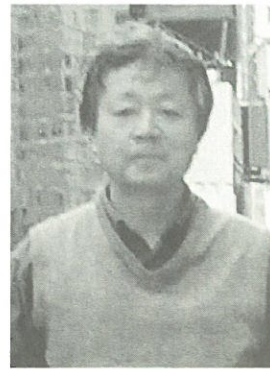
大学院に進んでからは「論文はあまり読まなかったけれ

ど、どうすれば温度を低くできるか、私なりに全知全能を傾けて考えた」。フィンランドへ留学し、最先端の研究成果をあげられるようになった。やがて理学部長に、二年前には学長になる。

「中三では就職組で、自習になると、お前たちは運動場で遊んでいなさいとよくいわれた。そのころを思い起こすと、何でもいまこんなことになっているのか、不思議です」。勉強は、したくなったらすればいい。英語だって、高校に入ってから始めても十分。ただ、やりたくなつたときにきちんとできる体制を作っておく必要はあるが、と児玉さんは考える。

気になるのは、日本人の思考習慣だ。前人未到の領域に新たに道筋を付けていくのが、いまだに苦手である。学会発表でさえ、「どう考えるか」ではなく「○○を知っているか」が論議されがちだ。「考える力」が乏しいのは大学生だけではない。

キャンバスに自画像を描こう



工学研究科・工学部
南 齋 征 夫

やや逆説的だけれど、大学に入ってきたときに、人、社会、自然などについて実はまだよく知らない、ということを実感することはすばらしい。なぜなら、それらについて知ってゆくという

冒険がこれから先に待ち構えているのだから。ここで「冒険」と言う言葉を使ったのにはそれなりにわけがある。そのわけを説明しよう。

「禅的生活」という最近よく売れているらしい本について、作家の重松 清さんが次のように書いている。へ脳のことは宇宙同様まだまだ謎が多いが、坐禅や瞑想によってそれまで確定していたニューロンネットワークがニュートラル状態になり、場合によってはネットワークの組み替えが促されるのかもしれない。さすがに、作家がこういう文脈の中で使う言葉は違うもんだと感心した。ネットワークの組み替え、ということばに。上に書いた「冒険」とは、いわばこのニューロンネットワークの組み替えに挑むことなのだから。先に言っておくけれど、大学を出るときに、ネットワークが大学に入ったときのままか、単にその

一部が肥大しただけで、一度も組み替えが起らなかったとしたら、それはほんとにさみしいよ。ネットワークの組み替えについてもっと具体的に説明しよう。禅のことが出たので、禅と親戚のような話（禅宗のお坊さん、表現がまずければお許しください）をしてみたい。法然から親鸞に伝えられたと言われる「悪人正機説」というのがあることは恐らく知っているでしょう。ちよつと長くなるが、聞いてほしい。

かつて、僕がロシアのサンクト・ペテルブルグにいたときに、同大学の若い学者のニコライ・ポニコロフと一緒にプスコーフという町に行ったことがある。このプスコーフから更に50kmくらい離れた、エストニアとの国境に近いところにウスベンスキー修道院という15世紀に建てられた美しい教会があつて、ニコライと僕はプスコーフ工科大

学のビクター・ランセフ先生にここへ連れて行ってもらった。



ウスベンスキー修道院の洞窟
(ミイラ化した僧の遺体が納められている) への入口

プスコーフの市内と修道院との間は古ぼけたバシに乗せてもらって往復することになっていた。往きの道中は、修道院についてのビクターの説明を聞きながら、昼食に何を食べようかとか、ちよつとくらいなら教会に行く前でもワインを飲んで

いいだろう、などと話を挟んだりして、途中の昼食時間を入れて二時間くらいかかっただろうか。お目当ての修道院に着いたのは、ちょうど、午後一時の鐘をお坊さんたちが撞くという時刻の直前だった。ビクターがお坊さんたちの鐘を撞いているところを見ようと言い出し、バンを飛び出して、ビクター、ニコライと僕の三人で修道院の長い参道を全速で走らなければならなかった。この修道院からの帰りのバンの中で、日本の宗教のなから始まって「悪人正機説」の哲学に話が及んだ。

「悪人正機説」の要点のところはこうだ。「善人なおもって往生をとぐ。いわんや悪人おや」。この意味を僕はビクターに次のように説明した。「善人はもちろん天国へ行くんだ。しかし、本当に真っ先に天国に行ける資格があるのは悪人なんだよ。」「人間はみんな自分で生まれようとして

生まれてきたわけではない。英語でも生まれると言うことを受身形で言うでしょう。善人は善人と言う役割を、悪人は悪人と言う役割を与えられて生まれてきてしまったんだ。あたかも、舞台の上でそれぞれの役者がそれぞれの役割を演ずるよう指示されたかのように。なのに、悪人は世の中から嫌われ疎んじられてすごさなければならなかった。善人と悪人とはどちらが先に死後に救われるべきだと思う？」

ビクターは、しばらく考え込んだあと、僕の話を非常に面白いと言ってくれた。彼の判断の基準をひっくり返したようだ。

このとき以来、ウスペンスキー修道院からの帰りのバンの中で、僕が、ではなくて「悪人正機説」が、ビクターのニューロンネットワークを組み替えたんだと僕は信じている。

ネットワークの組み替えのチャンスはいくらで

もあると思う。なにしろ、人類はこれまでにおびただしい量の知を蓄えてきているのだから。たとえば、一つの知の例として、私たちの社会が扱っているところとしている民主主義を採り上げてみよう。この話はかつて教員の集会でもしたことがあるんだけど、ここでも紹介したい。

スペインに一八八三年生まれのオルテガという哲学者がいた。彼は一九三〇年の「大衆の反逆」という著書の中で民主主義について次のように書いている。「リベラル・デモクラシーは最高に寛大な制度である。なぜならば、それは多数派が少数派に認める権利だからであり、だからこそ、地球上にこだましたもつとも高貴な叫びである。それは、敵と、それどころか、弱い敵と共存することを宣言する。人間と言う種族が、これほど美しい、これほど逆説的な、これほど優雅な、これほど

ど軽業に似た、これほど反自然的なことを思いついたとは、信じがたいことだ。だからこそ、この同じ種族がじきにそれを捨ててしまおうと決意したからといって、驚いてはならないのである。この地上で確立するには、これはあまりにも困難で複雑な制度である。」

一九八九年にベルリンの壁が崩壊して以降、世界では二極体制が崩れ、リベラル・デモクラシーへ移行しようとする国がたくさん現れた。一方で、一九四五年以降六〇年を経た今日に至って、日本にいる若い人たちは、リベラル・デモクラシーを当然のこととして、日ごろは意識もしていないかもしれない。しかし、オルテガの凝縮された先の文をよくよく読んでみれば、民主主義とは単なる多数決原理ではないということをおぼたろうし、この文を読む→考えるを繰り返している

うちに、ネットワークの組み替えを経験できるのではないか。

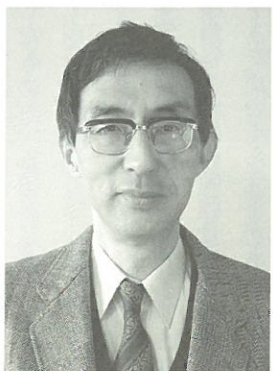
「このような、ビクターと僕の話やオルテガの民主主義をおして言いたかったことは、大阪市立大学の総合教育科目には君のニューロンネットワークを組み替えてしまう知的冒険のネタがたくさんあると言うことだ。大学にいる間に、ぜひともニューロンネットワークの組み替えを経験してほしいと思っっている。

最後に、僕はこの記事に、自分で描いたマンガを添えることにした。君は、将来、自分が大学を出るときの、おそらくネットワークの組み替えを幾度か経験した自画像を想像して描こうとしている。まわりが暗いのは、君のネットワークが多分に今はまだ未熟だろうし、まして、今の大学入試制度の下では、君がすでにニューロンネットワー

クの組み替えを経験しているはずはないという僕の確信的推測を表している。この推測は当たっているはずだ。大学では、冒険、を試してみようではないか。



「この頃の学生」のための勉強法



文学研究科・文学部
井上浩一

最近の学生は勉強しない？

「この頃の学生は勉強しないなあ」と言われたことがあるでしょう。「最近の学生は勉強しない」という言葉は、教員のあいだでは「いいお天気ですね」という代わりに使われる決まり文句です。阪和線でたまたま隣り合って座ったら、「この頃の学生

は……」「そうそう、うっとこの学生も……」から会話がはじまります。

ところがこの決まり文句、十年前にも、二十年前にも使われていました。さらに昔、三十年前、というと私はまだ学生でしたが、やはり「この頃の学生は勉強しなくなっただなあ」と（情けないことに）面と向かって言われていました。そのまた昔、四十年前、五十年前の先生も「戦後、学生は勉強しなくなっただなあ、嘆かわしい」と言っておられたと思いますし、ひょっとすると、「明治の学生（明治大学ではありません）はよく勉強したが、大正の学生（同上）は勉強しない」なんて科目もあったかもしれません。

この現象、少し変だと思いませんか。この目で見てきた先生が、しかもほとんどすべての先生がそうおっしゃるのですから、まんざら嘘ではなさそうですが、それにしてもやや疑問ありですね。そもそも「この頃の学生はさっぱり勉強しない、三十年前にはこんなことはなかった、あの頃は……」とい

う、その三十年前の学生も同じように言われていたことは、威張るほどではありませんが、私が生き証人ですから間違いありません。

この分でゆくと、今から三十年たてば、「この頃の学生は勉強しない、三十年前の学生（皆さんのことです）は本当によく勉強したものだ」と、先生は口をそろえて言っているかもしれません。いや、五十歳になった皆さん自身が「我々が学生の頃はもつと勉強したものだ、最近の学生ときたら……」と言いつつ出ずんじやないかと思えます。

「昔の学生」の真相は

でも本当に、学生の勉強量はどんどん減っているのでしょうか。いくら元手があるといっても、そんなに長いあいだ、ただただ減り続けるなんてありえないのは、貯金通帳を見ればわかります。普通なら、とつと破産していそうなものです。何かわけがあるに違いありません。「この頃の学生は勉強しない」の真相を、二十数年教員をしてきた私は、次

のように推理しています。

その第一の手がかりは、「記憶は時とともに薄れる、かつ時とともに肥大する」という法則にあります。三十年前のことは記憶が曖昧になっています。全体が均等にぼやけていけばよい(?)のですが、ある部分はすっかり消えて、逆にある部分は異常に膨らんでくるというのが人間の記憶です。

「教師はよく勉強した学生のことばは憶えている」というのが第二の手がかりとなります。要するに、自分に都合の良いことは憶えている、という法則です。憶えているだけではなく、その都合の良い記憶はどんどん肥大します。実際は、準備が間に合わなかった一回だけだったのに、その時の印象が強く残り、「昔のなんとか君は、毎回毎回、僕の演習の準備を徹夜でやっていたよ」となるのです。逆に、ろくに授業にも出なかった学生なんか、三十年どころか、数年で記憶から飛んでしまいます。こうして、「昔はよく勉強する学生ばかり」になるのです。卒業生もこの現象に大いに貢献しています。とく

に出世した人ほど「最近の学生は……」という傾向があるようです。そこには、ちよつと威張つてみたいという気持ちに加えて、若者への嫉妬も混じっているように思いますが、どうでしょうか。

というわけで、「この頃の学生は勉強しない」と言われても、気にする必要はないのですが、私が言いたいの、それよりもむしろ、勉強しなかった学生は存在したことすら忘れられる、という恐ろしい事実です。どうします、あなた？

「いいよ、学籍簿に残っているから」「サークルの仲間がいるもん」という反論があるかもしれませんが、でも、大学の本質は建物でも卒業証書でもなく、学問を通じた教員と学生の間関係です（サークルは課外活動）。こうなると、あなたは「昔の学生」には入れてもらえません。つまり、大学から抹殺されるのです。勉強しようかな？

つづつAより三つのC

さて、その勉強なのですが、「パンキョウはひと

つのAより三つのC」という言葉を先輩から聞いたことがありますか。こちらの科白も、なるほどと思わせる説得力がありますね。さっそく実行してる人もいましょう。もつとも「パンキョウ」という言い方は時代遅れで、その昔、一〜二回生を教養課程と呼んでいた頃の「一般教育科目」の略称です。現在では総合教育科目といえます。

それはともかく、確かにある科目をしつかり勉強して、バッチリAをもらったけれど、他の科目には手が回らず、単位をボロボロ落として進級できない、というのが最悪の事態であることは間違いありません。全学共通科目、とくに総合教育科目はそれぞれ必要最低限だけやって、とにかく単位を効率的にそろえるんや、という先輩の教訓ももつとも思えます。たとえCが並んでいても、専門の成績じゃないから、就職にも響かないだろうという計算もあるようです。

しかしと、ここでもちよつと考えてみましょう。

自分はどんな人間になりたいか、時代が、社会が私

に求めているものは何だろう？あなたはどこかの学部・学科に所属し、専門の勉強をします。ところが、そこでいくら勉強しても、せいぜいのところ「専門バカ」どまり、といって勉強しなければ「専門」もつかない単なるバカです。どちらもありなりたくはないし、お呼びでもありません。バカはもちろん、「専門バカ」にもならないようにと、総合教育科目を幅広く学ぶことが求められているわけですね。

「でもお……」おっと、反論ですね。わかります。幅広く学べといわれても、理数系が嫌いで文学部に来たのに、なんで今さら……。そもそも「パンキョウ」の勉強をしても、自分のためになるようには思えない。そんなあなたに私からの提案です。

自分で決めよう、副専攻

自分の学部や専門とは別に、なんとなく興味のある分野があるでしょう。「工学部だけど歴史はわりと好き」とか、「論理パズルみたいななん解くの得

意」とか、誰でもなにかありますよね。分厚い『全学共通科目シラバス』をパラパラめくってみてください。総合教育科目がたくさん開講されています。時間割とも相談しながら、関心のある分野から、これはと思う科目をひとつ選びましょう。文系の学生は理系の、理系の学生は文系の、とまでは言いませんが、自分の学部とは関係のない科目にするのが大切です。

その科目と本気で付き合ってみましょう。もっとも一回目の授業で、先生の顔を見たとき、ではないにしても、ちょっと聞いただけで「はずれた」と思うかもしれません。その場合は選びなおし。とにかく一科目だけ本気で受講するのです。毎回いちばん前の席に座るくらいの意気込みでゆきましょう。レポートとなれば、表紙や目次もつけて、まるで本のようなやつを提出してください。

次の学期も同じ分野で一科目だけ、やっぱり本気でやってみます。最初よりもかなり楽に受けられるでしょう。自分が成長しているのがわかります。ど

うやら専門とは別に、これなら私にまかせなさいといえる分野ができました。

このように、自分の専門と違う分野をひとつ、うんと深く勉強する、これを外国の大学では副専攻といっています。人間の目はふたつあります。ふたつあるから距離感が把握できるのです。大学の勉強も同じ。副専攻をもつて複眼になれば、世界が立体的に見えてきます。なぜか、まんべんなく勉強するより、なにかひとつに集中した方が教養も身につくようです。

どの科目を選んでも複眼効果は同じです。迷っている人は、総合教育科目のなかの演習科目をとってみてはどうでしょう。少人数クラスで手ごたえ充分です。それぞれの分野ごとにありますから、挑戦してみてください。

自分が何に興味があるかわからないという人は、今年からできた「一回生セミナー」を受けるのもひとつの方法です。新入生に大学での勉強法をしっかりと学んでもらおうという科目ですね。こんな科目が

ぜひ必要だと提案したら、嬉しいことに、さっそく開講されることになりました。大阪市大は教育熱心な大学です。もっとも「言いだしっぺの先生方が担当してくださいよ」ということで、私も担当者になってしまいました。受講生を待っています。

ひとつのAと三つのC！

一科目集中勉強、他は手抜き。そんな無茶をして、単位がそろわなかったらどうしてくれるんだ、責任とってくれるんやろね、といわれそうですね。問題はそこです。残りの科目は単位を落とさない程度にうまくやる、このコツをつかむのです。実は、ひとつの科目を徹底的にやると、単位を落とさない範囲でどう手抜きしたらよいか、夢にまで見た(?)そのコツがわかるようになります。とりあえず、それまでの応急処置をお教えしましょう。ただし、あくまでも応急処置です。

危ない答案やレポートの最初に、「私は木野先生の『公害と科学』(頑張った総合教育科目名を書

●●●●● 筆者略歴 ●●●●●

児玉隆夫 (こだま たかお)

1940年生まれ
1971年大阪市立大学大学院理学研究科博士課程単位修得退学
理学研究科・理学部教授を経て
1998年4月より2004年3月まで大阪市立大学学長
専攻分野／低温物理学

南 齋 征 夫 (なんざい ゆくお)

1941年生まれ
1967年大阪市立大学大学院工学研究科博士課程中退
現在、工学研究科・工学部教授
専攻分野／高分子材料強度
担当講義／材料強度学、機械設計、高分子固体力学、
固体材料熱力学

井 上 浩 一 (いのうえ こういち)

1947年生まれ
1976年京都大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学
現在、文学研究科・文学部教授
専攻分野／西洋史 (ビザンツ帝国史)
担当講義／西洋史の見方、西洋社会の歴史、1回生セミナー

編集後記

総合教育科目ガイドブック「アン ロソ」は、2002年度まで教務委員会が発行してきましたが、2003年度に新しく「大学教育研究センター」が設立されました。

そこで「アン ロソ」も、新たにこのセンターの出版物として再発行することになりました。これまでは秋に刊行されていた『「全学共通教育」のひろば』特集号という位置づけでしたが、今年からは独自の企画として発行されます。

そのために、従来のナンバリングですと『「全学共通教育」のひろば』No.16となるはずですが、今号からは独自のナンバリングを採用して、ご覧のような「アン ロソ」第5号をお届けすることになったわけです。

この小冊子は、ご覧のとおり形は小さいのですが、中味は充実していると自負しています。とくに新入生の皆さんに、総合教育科目を考えるためのヒントとして、また先達の人生の知恵を学ぶ場として、活用していただければ幸いです。

大学教育研究センター ホームページ
<http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/>

く、必ず担当教員の名前も書くように)で大レポートを書きました。そのため、申し訳ないことに、先生のテストの勉強がおろそかになってしまいました。事情を御賢察いただき、なにとぞ……」と書くのです。注意したいのは、このアピールは最初に書くこと、つまり答案やレポートより先に読んでもらうことです。

効果のほどは保証できません。でも、「なんで俺の科目は手抜きなんだ」と怒る先生はまずおられないでしょう。少なくとも「体育会のなんとか部で、関西の何位で、就職も決まっております……」などと書くよりは好意的に受け止めてもらえるはずです。ボーダーラインなら拾ってもらえるかもしれません。ただし、先生同士で、「法学部の某君は、先生の科目を熱心に受けてるらしいですね、おかげでこっちはえらい目に……」「ええー、嘘でしょ、ひどい手抜きのレポートですよ」とバレれば、二科目まとめて落ちますから、本当に頑張った時だけ書くように。

こうしてあなたは、ひとつのAと三つのCを稼ぎ、無事に進級します。副専攻をもった一味違う教養ある学生となつたうえに、手抜き勉強の方法まで身につけ、薔薇色の学生生活を送るのです。

卒業後も大きな顔ができます。お情けのCだったあなたを憶えている人はいません。A、それも飛びつきのAをとったあなたのことは、教壇から語り継がれるでしょう、「昔の学生は……」と。いや、あなた自身が、ぎりぎりCで通ったことは忘れて、Aの科目だけ憶えており、「あたしたちの頃は、パキンキョウも手抜きせずにやったものよ、この頃の学生はほんとに教養がないんだから……」と、大して出世しなくても偉そうにいえるのです。どうですか、総合教育科目? さあやってみましょう。